

21世紀型教師に求められること

私は、常々新しい時代には新しい教育方法が必要だと感じています。

古い教師像に拘る教師に、私はいつもこういいます。

「極端な例かもしれませんが、江戸時代の教育技術が現在役に立つとお思いですか」と。

実は、そんなに極端な例を出さずとも良いのです。

国語教育の神様、芦田恵之助の教育技術が今通じるわけがないですし、斉藤喜博だって怪しいと思うのです。

もちろん、そうした先達の教育方法には今日でも不易として通じる部分もあるでしょう。

しかし、子どもが変わっている以上、すべてが通用するなんてことはあり得ないのです。（「子どもは変わっていない」という議論も存在しますが、どう考えても古い枠組みでは理解しがたい子どもがいるというのが現場の実感ですね）

私が、多大なる影響を受けたあのT O S S（旧法則化）の教育技術でさえ、それだけではだめだと、私はここ最近考えるようになっていきます。

そこで私なりに21世紀の教師に何が求められるのか、書いてみます。

たいへん大仰で、恐縮ですが……。

その1 単元構成力

毎時間ごとに教えるべき内容がはじめから決まっっていて、教科書が存在するような教科指導ではなく、単元を教師が構成し、目標も教師が設定するような発展学習系の単元を構成する力。これが必要です。

子どもが真剣になるような学習テーマを選定し、その上で子どもたちが身につけていく学力を計画的に配置することのできる力。これが求められます。

その2 21世紀型学力形成力

コンピュータの授業をしたことがない、英会話の授業をしたことがない、環境教育にリンクする内容を指導したことがない、ボランティアの授業をしたことがない、そうした教師は置いてきぼりを食うでしょう。

上手にできる必要はないと思います。

できるだけ、勉強する。

本を読む。

ビデオを見る。そうしたことが必要なのでしょう。

その3 特別支援教育的視点を持っている

「6.4パーセント」

なんの数字かご存じでしょうか。

軽度発達障害の子どもの割合です。

40人学級で実に2人から3人。

「俺のクラスにはいない」ということは、ほとんどあり得ないのです。

靴をいつも左右反対に履いている。

ノートの字が罫線に収まることがない。

話しているときに目が合わない。

じっと座っていることが困難。

教師の話聞いていないような気がする。

こうした子どもがいるときに「気になる」かどうか、これが大事な教師としての資質なのです。

こうした子がいるときに「ひょっとしたら」と思い、記録をつけ、必要に応じて管理職、コーディネーターに相談し、親にもアプローチする。

こうしたことが今後必要です。

また、特別支援教育的な動き方というのは、チームで動くということです。

小学校教師はこれが苦手ですが、コーディネーターやTTとの連携で、子どもや親をサポートすることがどうしても必要です。

その4 基礎学力を付ける力

ここからは、不易の部分となります。

なんとといっても、1000時間以上の授業時間のなかで、子どもたちにしっかりと学力を付けることができない教師はだめです。

その目安は、市販テストの学級の平均点が90点です。

通常の漢字豆テスト、計算プリントも学級平均90点が目安です。

私は、5年目あたりから、コンスタントにこの数字をクリアできるようになりました。

それまでは、悲惨なもんです。

その5 学級統率力

統率というと、集団に対するアプローチばかりが目につきます。

むしろそうしたことは、学級形成の初期段階で非常に重要です。

目標を設定し、子どもたちと契約し、目標に迫るような手だてを打つ。

こうしたことが、初期段階では重要です。

しかし、一方で、一人一人の子どもを優しく包み込み「それでいいんだよ」と常に認めてあげることも必要です。

「集団に厳しく、個には優しく」これが一つの要点です。

ダメ教師になる5箇条

- 学ばない(教育書を読まない、買わない。教育雑誌を読まない。)
- 今の自分でいいと思う(自己否定をしない、できない。)
- 子どものせいにする(言い訳することに全精力を使う)
- 子どもに冷たくする(問題を起こす子ども、勉強ができない子どもを愛おしく思わない。「困った子」として認識する。そして、いつも子どもを怒鳴りつける。怒鳴ることが指導だと思っている)
- 教師を単なる仕事と思う

不登校へのアプローチ～お節介試案～

次のような問いに答えられますでしょうか？

- 1 不登校になる子どものうち「教師との関係」をその理由としてあげた子どもはおよそ何パーセントいたか。
 - 2 では、不登校になっている子どもを担当している教師のうち、「教師との関係」を理由に挙げたのは何パーセントいたか。
- さて答えは。

1が、20.8パーセント
2が、1.7パーセント

教師は少し反省が足りないようです。

さて、不登校を長期化させない第一の手だては難でしょうか。

それは、

早期発見、早期治療

特に、初動3日がポイントだといわれます。

そして、学校のシステムとして不登校傾向にある子どもを、年度を変えてもフォローしていくシステムが必要です。

たとえば、

月3日以上の欠席をした子どもについて個票を残す

というようなことです。

月末統計の際に各担任に次のような票を書いてもらうのです。

個票（取り扱い注意）

年	出席番号	名前	性別	担任名				
			男 女					
当月欠席数		4月からの累積欠席数		昨年度欠席数				
理由	病気・けが（ ） 不登校傾向 ・保護者は病気と知っているが登校しぶりがある。 ・集団になじめず些細な理由で休みがち。 不登校 保護者が登校させない。 （理由 ） その他（ ）		児童の様態	登校に対する本人の意思 たいへん強い つよい 弱い たいへん弱い 軽度発達障害の疑い ない ややある ある 診断を受けている				
	保護者から学校に連絡があった。 連絡帳 電話 その他（ ） 担任からの連絡 担任が電話で保護者に欠席事由を聞いた。 担任が家庭訪問をして保護者と話した。 担任が家庭訪問して本人と関わった。 担任以外が本人と関わった。 プリント類を家庭に届けた。（だれが？ ） 登校時の様子 授業にはでていない（活動場所 ） 授業にでたりでなかったり 授業にはでている 連絡状況 保護者・本人とも連絡が取れない。			その他の様態 学業不振 いじめられた経験がある いじめた経験がある 虐待の可能性がある 家庭生活に変化があった （ ） 親子関係にトラブルがある 登校に対する保護者の意識 たいへん強い つよい 弱い たいへん弱い 不登校支援チーム メンバー （ ）（ ） （ ）（ ） 本人の性格 まじめ 周りの刺激に敏感 孤立感 内向的 緊張しやすい 自己中心的 ストレスに対して逃避的 幼稚 楽観的				
各関係機関との連携	教育相談機関への相談（機関名 ） 児童相談所への相談 民生委員への相談 民間施設への相談 医療機関への相談、通院 巡回相談による相談 保険事務所への相談 その他（ ）							
登校への手だて			校長所見					
			校長	教頭	教務	生徒指導	担任	